私と王子と嫌味なアイツ

鈴夜 音猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と王子と嫌味なアイツ

【Ｎコード】
Ｎ４３６２Ｎ

【作者名】
鈴夜　音猫

【あらすじ】
私が好きなのは学校で人気の王子様。
いつも嫌味なアイツに邪魔されるけど――

前編（前書き）

めっちゃベタな展開だと思いますが、お付き合いの程をよろしくお願いしますm（__）m

登場人物

浅川棗（アサカワナツメ）

高遠雅樹（タカトウマサキ）

篠崎圭（シノザキケイ）

前編

――私は彼が好き。でも彼が好きなのは、他の子なんだ。

青い空に吸い込まれる白球。同時に湧き上がる歓声に見送られ、走り出した背番号1番が私の目に眩しく映る。

彼はうちの高校のエースピッチャーで、人気者の高遠雅樹くん。
爽やかな笑顔と誰に対しても優しい彼は”王子”と呼ばれている。
雅樹くんがマウンドに立てば、誰もが彼に熱い眼差しを向ける。
そして女の子たちから黄色い歓声が上がるのだ。

「お疲れ様」

練習試合を勝利で飾り、ベンチに帰ってきた雅樹くんにタオルを差し出す。

「ありがとう」

タオルを受け取り、爽やかスマイルを私に向ける雅樹くん。
この時だけは、彼の笑顔を独り占め。マネージャーの特権だ。

「おい、浅川棗。俺にもタオルよこせ」

雅樹くんの背後から偉そうに私に指図する、態度も図体もデカい男、篠崎圭。私の天敵だ。

せっかくの雅樹くんとの至福の時を邪魔されて、ムカついた私は篠崎にタオルを投げつけた。

「あぶねぇな」

危ないと言いつつ飄々とした様子でタオルをキャッチする篠崎。まぁキャッチャーなんだから採れなきゃ意味ないとは思うけど、なんだか腹立たしい。

「ガサツだな、浅川棗。もっと女らしくしろよな」

そう言って私の頭をポンと叩き、篠崎は部室へと去っていった。お返しに蹴りをお見舞いしたかったけど、一歩がやたらデカい篠崎は既に射程外まで進んでいて、私はますますイライラを倍増させたのだった。

前編（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます（＊^＿^＊）

今回のお話、高校野球をテーマにしたかったんですが、若干遅かった……

そしてベタで申し訳ありません。

中編

試合を終えた部員たちが楽しげに話しながら帰る中、マネージャーの私は片付けに勤しんでいた。
その途中、ふと目をやった校門の側で見つけた二つの影。あまり見たくはなかった光景がそこにはあった。
そこにいたのは他校の制服を着た可憐な少女と、うちの学校の王子様の寄り添う姿。
ニヶ月前にできたという彼女さん。そのことを教えてくれたときの雅樹くんは本当に幸せそうで、太刀打ちできないんだって容易に分かった。
それでも、少しでも側にいたくて。思いが通じなくてもいいと、時折微笑んでくれることで満足だと思ってた。
けど目の前に突きつけられた現実は、私の心に重くのしかかってきた。

やっと全て片付け終えた頃には日はとっくに暮れていた。
荷物を両手いっぱいに抱え、薄暗くなった道を部室に向けて歩き出す。

「……げっ」

ドアを開けた瞬間、思わず口に出してしまってから慌てて口を噤む。
部室のドアを開けてすぐ見えたのは、椅子に腰掛けたまま動かない篠崎圭の姿だった。
誰もいないと思っていた部室内にいた一番会いたくない奴の姿に

げんなりする。さっきのショックに加えてのダブルパンチだ。
じっと入り口から観察したところ、どうやら眠っているらしい。それを遠目ながら確認して、私は音を立てないよう中に入った。
荷物をそっと下ろし、定位置に戻していく。本当は今すぐにでも部室から去りたいんだけど性格上ちゃんと戻さないと気が済まない。
なるべく音を立てないよう、けれど手早く荷物を片付けていく。
全て戻し終えて恐る恐る振り返ると、まだ篠崎は眠っているようだった。

ユニフォーム姿で椅子に腰掛けた状態のまま寝ていることに若干呆れてしまう。
汗をかいただろうに、気持ち悪くないのやら。てか、そのままだと風邪をひくだろう。
そう思うと放っておけず、小さくため息をつくと私は大きめのタオルを一枚手にとった。

起こしてしまえば済むんだろうけど口論になりそうなのは目に見えている。けどそのまま出て行く訳にもいかないから、タオルをかけていってやることにした。
タオルじゃあまり意味ないかもしれないけど、ないよりはましなはずだ。
ずり落ちないように肩までしっかりかけてやりながら、私は篠崎の寝顔に目を奪われてしまった。

いつも憎たらしい顔つきなはずなのに、寝顔となると一転してなんだか可愛かった。
男のくせに睫毛長いし。よく見るとカッコいい部類に入る顔立ちだ。

「……ん」

近くで見ていると、篠崎が僅かに身じろいだ。
ここで起きられるとまた嫌味を言われそうだ。
私は慌てて部室の出口へと忍び足で向かった。

後編

なんで私はバカなんだろう。
慎重に音を立てないようにしていたはずなのに、最後の最後で私はゴミ箱を勢い良く倒してしまった。

「……なにしてんだ」

私の祈りも虚しく、やつは起きてしまったらしい。
言い訳をあれこれ考えてはみたけど、思いつくはずもなく、私は諦めて散らかしたゴミを黙々と片付け始めた。

「お前バカだな、倒したのかよ」

「悪かったわね。別に好きで倒した訳じゃないわよ」

一緒にしゃがんでゴミを拾い始める篠崎に、申し訳なく思うけどどうしても憎まれ口を叩いてしまう。素直にありがとうも言えない自分が腹立たしかった。

「お前……可愛くねぇな」

ため息混じりに言われてムカつく反面、気分が落ち込んだ。
確かに自分でも可愛くないとは思う。だから好きな人にも選んでもらえなかったんだ。
けど、面と向かってそうはっきり言われると正直傷付く。まぁ自業自得なんだけど。

「はいはい。私は可愛くありませんよ」
「お前なぁ……ったく、なんで俺はこんなやつを……」
「は？　何？」
最後の方からゴニョゴニョと声が小さくなって聞き取れず、イライラした私は篠崎に食ってかかる。
「言いたいことあるならはっきり言えば？」
拾ったゴミをゴミ箱に突っ込んで、立ち上がった私は篠崎を見下ろす。するとやつは何を思ったのか、私を睨みつけてきた。
「……鈍感な奴」
「はぁ？　なにそれ。あんたね……っ」
言い返そうとした私の言葉は、声として発せられる前に消えてしまった。
突然された甘い行為。離れていった温もりに、思わず確かめるように唇に触れた。
「……お前が好きなんだよ」
ぶっきらぼうにそう告げて、篠崎はさっと視線を逸らす。
「……は？」
「は？って……お前な、人が告ってんのに……」

呆れたようにため息を疲れるけど、私は頭が正常に働いていない。
「篠崎は私のこと嫌いなんじゃ……」
「なんでそうなる」
「だって……いつもからかうじゃん」
いつもの言動を考えると、好きだなんて言われても信じられない。
すると篠崎はガシガシと頭をかいて、グイッと私を抱き寄せた。
「あれは……悪かった……その、ついな……」
抱き締められた腕の中、そっと見上げればいつもと違う紅い顔。
「……見んなよ」
照れくさそうな、いつもと違う表情に、不覚にもちょっとときめいたのは内緒にしておこうと思った。

番外編

――俺はあいつが好きだ。けど、あいつが好きなのは別のやつなんだ。

俺の好きなやつ、浅川棗。俺が所属する野球部のマネージャーをしていて、俺とバッテリーを組む高遠雅樹を好きなやつ。
練習中、ずっとあいつの目は高遠を追っている。そのことにイライラしながらも、高遠の実力も分かっているからどうしようもない。
なんで高遠しか見ないんだ。不毛な想いだって知ってるくせに。
高遠に彼女がいることをあいつは知ってる。だって高遠が彼女の話をした時、俺も居合わせていたから。
彼女がいるって聞いて一瞬悲しそうな顔になったけど、すぐに笑顔で祝福したあいつ。その姿が痛々しくて、抱きしめてやりたくなる気持ちを抑えるのが大変だった。
あの時、こいつを振り向かせたいって、そう強く思ったんだ。

「……ねぇ」

「あ？」

呼ばれて顔を上げれば、ムスッとした浅川が俺を睨んでいた。
今日は休日。珍しく練習もなく暇をしていたら、浅川から呼び出

しのメールがきた。
浮き足立ちそうな気持ちを抑えていると、変に緊張して表情も態度も堅くなってしまう。そのことに浅川は不満そうな顔をした。
「やっぱり嘘なんじゃない？　私のこと好きだとか」
「なっ……」
精一杯の俺の告白を”嘘だ”と言われカチンとくる。
「だって、いつも笑わないじゃん」
少し拗ねたように口を尖らせる浅川に一瞬ポカンとする。
「は？」
「私が好きなら笑ってよ。そんな怖い顔してないでさ」
身長差から俺を上目遣いで見上げてくる浅川。やべ、可愛いとか思った。
「あ、ちょっと！　そっぽ向かないでよ！」
赤くなったであろう顔を隠すため、勢いよく顔を背けた俺に浅川はつかみかかる。
勘弁してくれ。嬉しいけれど、まだ戸惑いの方が大きいからまともに顔なんて見れやしない。
「つか……返事もらってないんだけど」
仕返しとばかりに言ってやると、つかみかかる勢いがぴたりと止

まった。
不思議に思って恐る恐る浅川に目を向ければ、ものの見事にタコになった浅川が恥ずかしげに視線をさまよわせていた。
「っ……！？」
「……その顔、反則」
ちらりと見えてる額に口付けてやると、さらに茹でだこ状態になる。
そんな浅川を可愛いと思いながら、俺はこれからに期待を寄せた。
これからは嫌味は言わない。
めちゃめちゃ甘やかしてやるから覚悟しとけ。と心の中で宣言して、俺は彼女の手を握った。

番外編（後書き）

お疲れ様でした↑
ここまで読んでいただきありがとうございますm（＿＿）m

野球、最初しかでてないし
作者が共学に行ったことないんで想像してみたけどいまいち分からなかった……

精進します……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4362n/

私と王子と嫌味なアイツ

2010年10月9日00時35分発行